山梨県巨摩地方人の体質人類学的研究

日本医科大学衛生学教室 (主任 古屋芳雄教授)

安 方 魁 人

Sakito Agata

まへがき

日本民族がツングース系、アイヌ系、また南方から渡来したマラヤ系等の多様な種元から成っていることは、多くの学者がこれを疑わないが、今日の日本人は、地域の差を問わず、その多様な種元が可成り良く混血し合っている。即ち東北地方人も九州人も、また山陰、山陽或は東海地方人も、その度合の差こそあれそのオリジナルな人種形質を互いに交換し合っている。

ただし、それにも拘らずそれらの地域の人々の特質は完全に渾融しているかという点、然うでない。多くの共通の要素の中で必ず古い形を温存している。そしてそれは近代的な交通の発達による混血の少ない地方程そうである。例えばアイヌでは内地人との接触多き地方では、そのアイヌの特性を次第に失いつつあるが、奥地に住むアイヌは今日でも極めて濃厚に原型をとどめている。

そこで今われわれが上述のような近代的人口移動や混血のあまり多くなかった地方だけを選んで、その地方住民を、体質人類学的観点から精密に測定し、これを比較し、相互の人種学的親近度 (型差) を計出することができるならば、それによつて、それらの地域住民の過去や、そのオリジナルな体質人類学的な諸形質を推定することができる筈である。

以上は古屋博士の永い間の信念に基づく研究態度で、古屋博士が常にいつている、「現在われわれの前にいる日本人は、現在日本人であると共に、過去の日本人の遺物であることを忘れてはならない」のである。即ち多くの人は過去の日本人を詮索するに専ら古墳の発掘や古代人骨にのみ依ろうとするが、その方法のみが正しいのではなく、この現代日本人の体質人類学的測定は、より以上に必要であり、また効果的なのである。

余も古屋博士の上述の企図をもつ研究の一環として山梨県巨摩地方の住民の体質人類学的研究を分担したのである。今その成績が纏つたのでここに発表しようと思う。

測定地概説

巨摩地方は日本最大の扇状地と言われ、西は白根連

峰、巨摩山脈、城山高地、市之瀬台地の四つの階段状の高地に接し、東は甲府盆地に移行している。余が測定した地域は主として中巨摩であつて白根連峰に源を発する釜無川及び野呂川が東西に貫流して居る。産業としては稲作、畠作を主とし、養蚕及び果樹、野菜の栽培を副として居り、一般の気風は質朴である。

巻末に記載せる参考文献によれば巨摩なる名称は「高麗」人が居住せる事を示したものであるとの事である。これについては次の様な根拠と成る点がある。すなはち神功皇后の三韓征伐の後、奈良朝時代に「高麗」から工芸師を招いて此の地に居住させたとの記録が残つて居り、又地名の中にもそれを推測するものがある。即ち巨摩は高麗であり八田は秦である。さらに平林、高尾等には古代人の居住した趾が多く見られ、台地の上には古墳が多く、金属或いは玉類の遺物も多く発見される。山麓や台地の上には出雲族と関係の深い諏訪明神を祀つた神社が多く見られる。

以上が巨摩地方の文献による説明であるが、本調査は固よりかくの如き伝説や歴史家の主観的解釈にとらわれることなく、現住の巨摩地方人について客観的、科学的測定を行い、現存の体型の上からそれが日本民族の人種構成に対していかなる地位にあるかを見ようとするものである。

第 1 図

次に余の測定した地方の略図を示す。本調査で測定したのは源村、白根村、藤田村、小笠原町及び甲西町である。

計測条件と項目及び計測法

この計測の目的は巨摩地方住民の精確な生体測定を行うことにより、その地方住民の特徴を把握することにある。従つて対象としては寄留者及び一見明かな体質異常者を除外したことは勿論、本人が類代さかのぼつてその土地に住んでいたことを確かめた上で満 20 歳以上 40 歳未満の成年男子を選択した。成績を出し得た有効調査数は総計 253 名である。測定数としては必しも多くないが、巨摩地域に限定したためにこれ以上の有効数がえられなかつたのである。

さて体型比較の基準として使用される諸項目は、少くともある条件に適合したもののみ使用されるべきである。すなわち

- 1) 生体において測定計測可能なもの
- 2) 計測簡単にして測定誤差少いもの
- 3) 測定点の明確に判定できるもの
- 4) 遺伝による変異の少いもの

等の諸条件であるが、余は古屋博士著「医学統計の理論と其応用」及び R. Martin 著 “Lehrbuch der Anthropologie” に従い、Martin 氏の規準に従つて同氏生体計測器を用い、次の 25 項目について測定を行った。

直接測定項目 (12 項目)

1. 身長
2. 耳珠高
3. 胸骨上縁高
4. 肩峰高
5. 中指尖端高
6. 肩幅
7. 頭最大長
8. 頭最大幅
9. 最小前頭幅
10. 顴骨弓幅
11. 下顎角幅
12. 形態顔面高

間接測定項目 (2 項目)

13. 耳頭高 = 身長 - 耳珠高
14. 全上肢長 = 肩峰高 - 中指尖端高

比及び指数 (11 項目)

15. 比上肢長 = $\frac{\text{全上肢長}}{\text{身長}} \times 100$
16. 比肩幅 = $\frac{\text{肩幅}}{\text{身長}} \times 100$
17. 比頭長 = $\frac{\text{頭最大長}}{\text{身長}} \times 100$
18. 頭長幅指数 = $\frac{\text{頭最大幅}}{\text{頭最大長}} \times 100$
19. 頭長耳頭高指数 = $\frac{\text{耳頭高}}{\text{頭最大長}} \times 100$

20. 頭幅耳頭高指数 = $\frac{\text{耳頭高}}{\text{頭最大幅}} \times 100$
21. 頭幅前頭指数 = $\frac{\text{最小前頭幅}}{\text{頭最大幅}} \times 100$
22. 頭幅顴骨弓幅指数 = $\frac{\text{顴骨弓幅}}{\text{頭最大幅}} \times 100$
23. 顴骨弓幅前頭幅指数 = $\frac{\text{最小前頭幅}}{\text{顴骨弓幅}} \times 100$
24. 形態顔面指数 = $\frac{\text{形態顔面高}}{\text{顴骨弓幅}} \times 100$
25. 顴骨弓幅下顎角幅指数 = $\frac{\text{下顎角幅}}{\text{顴骨弓幅}}$

計測器は Stadiometer, Stangenzirkel, Tasterzirkel, Gleitzirkel を使用し、測定票は古屋博士による身体測定票を用いた。被測定者はすべて上半身を裸にし、各項目について出来る限り精確に測定した。

測定の期間は昭和 26 年及び 27 年、28 年の三年間にわたり、時期は概ね各年の 7 月～8 月の二月にわたり、時刻は午前中、一部午後のものも含んでいる。

本論文に於ける数値取扱法及び計算法は古屋、川上両博士の著書に従つたものでそのうち主な記号、算出法は以下の通りである。

1. 人員数 N
2. 算術平均 M
3. 標準偏差 σ
4. 変異係数 V
5. M, σ, V の平均誤差は夫々 $m, m\sigma, mv$
6. 型差 ($T.D$) 及びその平均誤差 [$m(T.D)$]

$$T.D \pm m(T.D) = 10 \left(\frac{1}{\sigma_1} + \frac{1}{\sigma_2} \right) (M_1 \sim M_2) \\ \pm 10 \left(\frac{1}{\sigma_1} + \frac{1}{\sigma_2} \right) \sqrt{m_1^2 + m_2^2}$$

(古屋博士修正)

7. 平均型差 ($M.T.D$) 及びその平均誤差 [$m(M.T.D)$]

$$M.T.D \pm m(M.T.D) = \frac{\sum \left[\frac{20}{V_1 + V_2} \left(\frac{1}{\sigma_1} + \frac{1}{\sigma_2} \right) (M_1 \sim M_2) \right]}{\sum \left(\frac{2}{V_1 + V_2} \right)} \\ \pm \frac{\sum \left[\frac{20}{V_1 + V_2} \left(\frac{1}{\sigma_1} + \frac{1}{\sigma_2} \right) \sqrt{m_1^2 + m_2^2} \right]}{\sum \left(\frac{2}{V_1 + V_2} \right)}$$

(古屋博士修正)

軀幹四肢に関する研究成績

軀幹四肢に関する測定成績を一括すれば第 1 表の如くに成る。

第1表 軀幹四肢の計測値及び指数値

形 質		巨 摩 地 方 人
n		253
身 長 (cm)	$M \pm m$	159.50 ± 0.33
	$\sigma \pm m \sigma$	5.39 ± 0.24
	$V \pm mv$	3.37 ± 0.15
耳 珠 高 (cm)	$M \pm m$	146.90 ± 0.31
	$\sigma \pm m \sigma$	4.84 ± 0.22
	$V \pm mv$	3.29 ± 0.14
胸 骨 上 縁 高 (cm)	$M \pm m$	128.52 ± 0.28
	$\sigma \pm m \sigma$	4.56 ± 0.20
	$V \pm mv$	3.55 ± 0.15
肩 峰 高 (cm)	$M \pm m$	129.44 ± 0.28
	$\sigma \pm m \sigma$	4.53 ± 0.20
	$V \pm mv$	3.50 ± 0.15
中 指 尖 端 高 (cm)	$M \pm m$	60.37 ± 0.22
	$\sigma \pm m \sigma$	3.48 ± 0.15
	$V \pm mv$	5.70 ± 0.25
全 上 肢 長 (cm)	$M \pm m$	69.00 ± 0.20
	$\sigma \pm m \sigma$	3.26 ± 0.14
	$V \pm mv$	4.72 ± 0.20
比 上 肢 長	$M \pm m$	43.32 ± 0.08
	$\sigma \pm m \sigma$	1.40 ± 0.06
	$V \pm mv$	3.23 ± 0.14
肩 幅 (cm)	$M \pm m$	37.03 ± 0.10
	$\sigma \pm m \sigma$	1.61 ± 0.07
	$V \pm mv$	4.35 ± 0.14
比 肩 幅	$M \pm m$	23.28 ± 0.06
	$\sigma \pm m \sigma$	0.29 ± 0.04
	$V \pm mv$	4.20 ± 0.18

以下にその中の身長、上肢長、比上肢長について検討してみる。

1. 身長

身長は各種の身体測定に於いて測定せられ、人種形質の一指標として重要視されている。しかしこれは生活環境の如何により徐々にその平均値が変化することは周知の事実である。即ち栄養、体育等の種々な複合的影響により変化する。このことについて Villerne, Bachaner, Ammon, Meisner, V. Hölder, Quetlet, 古瀬, 吉田, 八木, 皆吉, 小泉, 須々木, 石原, 古屋氏等が報告されていることによつても明瞭な所である。又 Boas, Slohyhono 氏は親に比して子の身長増

大を認めているが、同一種族に於いて年代によりその平均値が増大することもわが国において、例へば文部省統計、及び大山氏等により周知の事実になつている。

しかし乍ら身長は無限に変化するものではなく、その種族として一定の限界があるので、そこに人種形質としての価値があるのである。また身長は他の諸計測に比して、比較的測定誤差少く、変異係数も小さく、大体 3.55~4.00 を示していると Boas 氏が報告していること等を参考とすると（本調査では 3.37）、種々の論議はあつても、身長の人種形質としての価値は著しく消失されることはなく、人種の近親度識別に役立つ重要な指標であることは明らかである。

巨摩地方人の成績は本調査の測定で平均値 159.50 cm であつた。Martin 氏の身長分類に従つて百分率を見ると第2表の如くである。即ち中の下、小の分類に過半数（69.5%）が含まれている。分類に於ける割合は大体において加賀平地人、出雲人に相似して居る。又他地方人との比較において判るように巨摩地方人はわが国に於いては、ほぼ中の下と小の中の中間位を示して居る。

第2表 身長分類表（Martin 氏による）

分 類	甚小	小	中の下	中	中の上	高
身長 (cm)	130.0 ~ 149.9	150.0 ~ 159.9	160.0 ~ 163.9	164.0 ~ 166.9	167.0 ~ 169.9	170.0 ~
巨摩地方人	5.53	42.29	27.27	14.63	7.51	2.77
大和人	0.55	35.98	28.73	16.51	10.84	7.39
信州飯田人	1.00	33.50	25.50	18.50	15.00	6.50
信州上伊那人	1.80	39.00	28.80	15.00	11.40	4.00
三宅島人	4.00	32.80	31.20	17.60	8.80	5.60
出雲人	2.35	41.88	26.33	15.61	8.24	5.56
越中人	3.88	60.00	21.66	7.77	3.88	2.77
飛弾人	4.11	57.78	21.92	9.96	5.11	1.12
加賀山地人	3.89	51.11	27.22	11.39	3.89	2.50
加賀平地人	3.01	44.15	27.54	14.40	7.38	3.53
土佐人		42.00	33.33	14.67	8.67	1.33
奥能登人	5.52	52.14	23.97	11.29	3.96	3.13
信州安曇地方人	1.70	36.49	29.49	17.58	9.07	5.67

次に Mollison 氏型差公式を古屋博士が修正した方法によつて身長型差を算出し、相互に各地方との間の近親度を見ると第3表の通りである。

これによれば巨摩地方人の身長は加賀山地、能登南部、白川、土佐、日向人に比較的近縁であり、彦岐、

第3表 身長に於ける巨摩地方人と他地方人の型差

各地人	M_2	巨摩地方人 159.50 ± 0.33	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	159.02	0.48	1.92 ± 1.98
越 中 人	158.41	1.09	4.03 ± 1.88
加賀平地人	160.28	0.78	2.85 ± 1.26
加賀山地人	159.24	0.26	0.97 ± 1.61
能登南部人	159.68	0.18	0.63 ± 1.25
奥能登人	158.94	0.56	2.02 ± 1.32
大 和 人	161.95	2.45	8.82 ± 1.31
出 雲 人	160.93	1.43	5.14 ± 1.28
白 川 人	159.44	0.06	0.22 ± 2.31
飛 弾 人	158.66	0.84	3.15 ± 1.35
東 海 人	158.96	0.54	1.93 ± 1.43
土 佐 人	159.77	0.27	1.01 ± 1.53
日 向 人	158.99	0.51	1.91 ± 1.37
三宅島人	161.29	1.79	6.58 ± 2.17
八丈島人	160.31	0.81	3.14 ± 1.60
壱岐人	162.78	3.28	11.80 ± 2.93
対 島 人	162.03	2.53	9.63 ± 2.34
南朝鮮人	163.38	3.88	13.96 ± 1.35
信州飯田人	162.89	2.89	10.72 ± 1.85
信州上伊那人	161.29	1.79	5.46 ± 1.60
北部信州人	163.20	3.70	14.06 ± 1.48
信州安曇地方人	161.65	2.15	7.95 ± 1.51

南朝鮮、信州飯田、北部信州人等に対しては $T.D$ 10.00 以上で比較的近縁度が少ない様である。

2. 全上肢長

全上肢長は肩峰高から中指尖端高をひいた間接計測値であり、巨摩地方人においては 69.0 cm である。

3. 比上肢長

身長に対する全上肢長の割合いを比上肢長と言い、他の種々な測定値に比して変異係数が小さく、安定性

第4表 上肢分類表 (比上肢長による)

分類	短 腕	中 腕	長 腕
比 上 肢 長	~ 42.9	$43.0 \sim 44.9$	$45.0 \sim$
巨摩地方人	25.25%	59.68%	15.07%
大 和 人	41.71	52.28	6.01
信州飯田人	35.50	58.00	6.50
信州上伊那人	25.00	58.50	16.50
三宅島人	16.00	64.80	19.20
出 雲 人	27.01	62.80	10.19
八 丈 島 人	23.85	61.28	14.87
信州安曇地方人	39.32	57.09	3.59

の大なる値である。即ち相互比較上重要な値の一つである。巨摩地方人においては 43.32 cm であった。

又比上肢長の Iwanowski 氏による分類に従い、上肢長の分類を巨摩地方人及び他のいくつかの地方について示すと第4表の通りである。即ち巨摩地方人は中腕が過半数を占め、全体の傾向は信州上伊那人、八丈島人、出雲人に相似して居る。

頭部に関する研究成績

頭部に関する種々の計測値及び指数値は人種相互間の近親度を論ずるに最も必要かつ重要な価値を有している。頭部に関する項目の計測値及び指数値の成績を一括すると第5表の様に成る。ここではそのうち比頭

第5表 頭部の計測値及び指数値

形 質		巨摩地方人
n		253
頭 最 大 長 (mm)	$M \pm m$	184.68 ± 0.34
	$\sigma \pm m \sigma$	5.47 ± 0.24
	$V \pm mv$	2.96 ± 0.15
頭 最 大 幅 (mm)	$M \pm m$	153.20 ± 0.30
	$\sigma \pm m \sigma$	4.79 ± 0.21
	$V \pm mv$	3.12 ± 0.14
頭 長 幅 指 数	$M \pm m$	82.71 ± 0.20
	$\sigma \pm mv$	3.21 ± 0.14
	$V \pm mv$	3.88 ± 0.16
比 頭 長	$M \pm m$	11.49 ± 0.02
	$\sigma \pm m \sigma$	0.45 ± 0.02
	$V \pm mv$	3.91 ± 0.17
耳 頭 高 (mm)	$M \pm m$	127.60 ± 0.59
	$\sigma \pm m \sigma$	9.46 ± 0.42
	$V \pm mv$	7.41 ± 0.32
頭長耳頭高指数	$M \pm m$	69.11 ± 0.31
	$\sigma \pm m \sigma$	5.07 ± 0.22
	$V \pm mv$	7.33 ± 0.32
頭幅耳頭高指数	$M \pm m$	83.43 ± 0.37
	$\sigma \pm m \sigma$	6.03 ± 0.26
	$V \pm mv$	7.23 ± 0.32
最 小 前 頭 幅 (mm)	$M \pm m$	104.24 ± 0.31
	$\sigma \pm m \sigma$	5.06 ± 0.22
	$V \pm mv$	4.85 ± 0.21
頭幅前頭幅指数	$M \pm m$	70.79 ± 0.23
	$\sigma \pm m \sigma$	3.67 ± 0.16
	$V \pm mv$	5.19 ± 0.23

長, 最少前頭幅, 頭幅前頭幅指数を除いた6項目につき検討を加へてみる。

1. 頭最大長及び頭最大幅

頭最大長及び頭最大幅は頭型及び各種の頭部指数を算出するのに基本となる計測値であり, 重要な人種形質として, Anders, Retzius 以来多数の研究者により使用され検討されて来た。そもそも頭型を数字で表現することは非常に困難なことである。従つて, 頭部の輪廓を数字で表現することは尙更困難なことである。しかし完全な方法とはいへぬが, この頭最大長及び頭最大幅を計測し, これにより頭型を数字にて表はし, その計測値及び比(指数)を求め, 相互の頭部の比較をする方法がもつとも合理的であり, 且つ今の所これ以上の方法は求められないと考えられている。そのために, この方法に幾分の疑義を示している Boas 氏等の学派もあるが, 頭最大長及び頭の最大幅は他の身体軀幹測定値に比較して, 熱帯地方の未開人に見られるような人為的変形を作るものを除き, 後天的な影響を受けること極めて少く, かつ骨部のためその測定

第6表 頭最大長に於ける巨摩地方人と他地方人との型差

各地人	M_2	巨摩地方人 184.68 ± 0.34	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	195.40	10.72	37.73 ± 2.03
越中人	193.70	9.02	31.11 ± 1.89
加賀平地人	188.00	3.32	11.45 ± 1.26
加賀山地人	187.30	2.62	9.51 ± 1.59
能登南部人	190.20	5.52	19.65 ± 1.30
奥能登人	188.10	3.42	12.27 ± 1.48
大和人	185.06	0.38	1.23 ± 1.34
出雲人	183.39	1.29	4.54 ± 1.68
白川人	187.80	3.12	10.51 ± 2.43
飛弾人	188.30	3.62	12.95 ± 1.39
東海人	185.99	1.31	4.51 ± 1.45
土佐人	188.42	3.74	12.79 ± 1.39
日向人	188.63	3.95	13.54 ± 1.42
三宅島人	187.13	2.45	8.62 ± 2.21
八丈島人	186.15	1.47	5.14 ± 1.58
壱岐人	191.88	7.20	22.46 ± 3.33
対馬人	188.66	3.98	12.73 ± 2.51
南朝鮮人	185.32	0.64	2.04 ± 1.30
信州飯田人	184.15	0.53	1.81 ± 1.88
信州上伊那人	185.67	0.99	3.41 ± 1.65
北部信州人	187.28	2.60	8.97 ± 1.45
信州安曇人	186.98	2.30	8.64 ± 1.51

第7表 頭最大幅に於ける巨摩地方人と他地方人との型差

各地人	M_2	巨摩地方人 153.20 ± 0.30	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	149.30	3.90	16.49 ± 2.00
越中人	150.92	2.28	9.14 ± 1.88
加賀平地人	149.10	4.10	16.89 ± 1.31
加賀山地人	150.80	2.40	9.98 ± 1.76
能登南部人	150.70	2.50	10.20 ± 1.33
奥能登人	151.90	1.30	5.30 ± 1.36
大和人	153.11	0.09	0.34 ± 1.27
出雲人	152.08	1.12	4.54 ± 1.32
白川人	150.70	2.50	10.32 ± 2.33
飛弾人	152.30	0.90	3.73 ± 1.42
東海人	149.96	3.24	13.25 ± 1.47
土佐人	151.46	1.74	6.89 ± 1.51
日向人	150.83	2.37	9.57 ± 1.34
三宅島人	152.54	0.66	2.82 ± 2.16
八丈島人	154.47	1.27	5.21 ± 1.59
壱岐人	152.48	0.72	2.93 ± 2.98
対馬人	154.26	1.06	4.61 ± 2.27
南朝鮮人	155.41	2.21	8.42 ± 1.32
信州飯田人	154.45	1.25	4.92 ± 1.90
信州上伊那人	152.96	0.24	0.97 ± 1.64
北部信州人	153.82	0.62	2.54 ± 1.47
信州安曇人	152.73	0.47	2.06 ± 1.55

誤差の少い計測値とされている。かくしてその価値に対する信頼度は依然として極めて高度のものが有る。巨摩地方に於ける平均計測値は頭最大長 184.68 mm 頭最大幅 153.20 mm であつた。またこの二つについて各地方との型差を算出すると第6表, 第7表の如く成る。

即ち頭最大長に於いては巨摩地方人は大和人, 出雲人, 東海人, 八丈島人, 南朝鮮人, 信州飯田人, 信州上伊那人等に近く, 北海道アイヌ人, 越中人, 加賀平地人, 能登南部人, 奥能登人, 壱岐人, 対馬人等とは $T.D$ 10 以上で近縁度がうすい。

頭最大幅に於いては, 大和人, 飛弾人, 三宅島人, 壱岐人, 信州上伊那人, 北部信州人, 信州安曇地方人に近く, 出雲人, 対馬人, 信州飯田人とは比較的近縁関係があるに対して北海道アイヌ, 加賀平地, 東海, 能登南部人等とは近縁度がうすく成つて居る。

2. 頭長幅指数

頭長幅指数は頭最大幅の頭最大長に対する%で示された指数で, 頭型の簡単な表示法であり, 人種の近親

度を示す重要な指数である。

巨摩地方人ではこの値は 82.71 で短頭型に属する。
これを Martin 氏の頭型分類に従つて分布を観察して
見ると第 8 表の通りである。

第 8 表 頭長幅指数頭型分類表

頭 型	長頭型	中頭型	短頭型	過短頭型
頭 長 幅 指 数	~75.9	76.0 ~80.9	81.0 ~85.4	85.5~
巨摩地方人	3.94%	29.25%	46.64%	20.17%
大和人	5.25	31.63	38.82	24.30
加賀山地人	4.78	53.09	34.83	7.30
信州飯田人	1.50	20.00	45.00	33.50
信州上伊那人	2.00	31.00	48.00	19.00
三宅島人	1.60	42.40	49.60	6.40
出雲人	2.14	31.64	45.84	20.38
八丈島人	1.79	30.00	46.67	21.54
加賀平地人	14.81	54.88	27.34	2.97
奥能登人	5.47	49.27	39.96	5.29
能登南部人	14.76	55.83	26.49	2.72
越中人	27.65	54.25	16.48	1.59
飛弾人	5.35	48.07	39.85	6.72
信州安曇地方人	0.57	43.67	48.20	7.56

分布は出雲、八丈島、信州上伊那人に似て居り、大部分は短頭型であるが、過短頭型の占める割合も他地方人に比較して多く成つて居る。

次にこれを型差によつて各地方人と比較してみると第 9 表の様になる。

第 9 表 頭長幅指数に於ける巨摩地方人と他地方人との型差

各地人	M_2	巨摩地方人 82.71 ± 0.20	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	76.59	6.12	41.43 ± 2.00
越中人	77.92	4.79	29.17 ± 1.90
加賀平地人	79.38	3.33	20.37 ± 1.29
加賀山地人	80.59	2.12	13.13 ± 1.64
能登南部人	79.36	3.35	20.72 ± 1.27
奥能登人	80.83	1.88	11.80 ± 1.49
大和人	82.76	0.05	0.26 ± 1.23
出雲人	82.67	0.04	0.23 ± 1.23
白川人	80.42	2.29	13.44 ± 2.41
飛弾人	80.92	1.79	11.06 ± 1.43
東海人	80.78	1.93	11.65 ± 1.47
土佐人	80.47	2.24	13.12 ± 1.50
日向人	79.98	2.73	16.16 ± 1.34

三宅島人	81.61	1.10	7.30 ± 2.11
八丈島人	82.95	0.24	1.38 ± 1.58
杵岐人	79.54	3.17	18.79 ± 3.02
対馬人	81.85	0.86	5.60 ± 2.29
南朝鮮人	84.00	1.29	6.72 ± 1.30
信州飯田人	84.10	1.39	7.90 ± 1.93
信州上伊那人	82.55	0.16	0.96 ± 4.08
北部信州人	82.18	0.53	3.05 ± 1.44
信州安曇地方人	81.58	1.13	7.83 ± 1.58

即ち、巨摩地方人は出雲人、大和人、八丈島人、信州上伊那人に対して近親度高く、北部信州人がこれにつぎ、北海道アイヌ人、越中人、加賀平地人、能登南部人、日向人、加賀山地人、奥能登人等とは近親度が低いことが認められる（第 2 図参考）

3. 耳頭高

耳頭高の測定には直接法と間接法の二つがある。この調査では身長より耳珠高を減じた間接法により算出した。

これによれば巨摩地方人では耳頭高の平均 127.60 mm で高頭型に属する。

型差による各地方人との比較は第 10 表の通りで出

第 2 図 頭長幅指数、頭長、頭幅の関係図 [註 図説明後述]

雲, 東海, 土佐, 日向, 八丈島, 信州飯田, 信州安曇人等と近縁で, 越中, 能登南部, 奥能登, 白川人等とは遠縁にある。

4. 頭長耳頭高指数

これは頭最大長に対する耳頭高の比を示すもので巨摩地方では 69.11 であった。

Saller 氏の頭長耳頭高指数による頭型の分類を示すと第 11 表の如く成る。

第 10 表 耳頭高に於ける巨摩地方人と他地方人との型差

各地人	M_2	巨摩地方人 127.76 ± 0.59	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	125.70	1.90	4.82 ± 2.06
越中 人	123.41	4.19	10.85 ± 1.96
加賀平地人	125.80	1.80	4.80 ± 1.61
加賀山地人	124.50	3.10	8.18 ± 1.78
能登南部人	123.20	4.40	12.51 ± 1.78
奥能登人	120.60	7.00	19.25 ± 1.76
大和人	130.91	3.31	7.28 ± 1.39
出雲 人	126.71	0.89	2.14 ± 1.48
白川 人	117.80	9.80	24.10 ± 2.24
飛弾 人	125.60	2.00	4.60 ± 1.49
東海 人	127.57	0.03	0.06 ± 1.47
土佐 人	126.65	0.95	2.11 ± 1.58
日向 人	127.42	0.18	0.45 ± 1.56
三宅島 人	125.68	1.92	4.20 ± 2.13
八丈島 人	128.11	0.51	1.17 ± 1.40
壱岐 人	128.61	1.01	2.36 ± 2.78
対馬 人	125.61	1.99	4.23 ± 2.30
南朝鮮 人	129.36	1.76	4.45 ± 1.58
信州飯田 人	127.68	0.08	0.18 ± 1.87
信州上伊那人	126.37	1.23	3.09 ± 1.75
北部信州 人	124.22	3.38	7.94 ± 1.56
信州安曇地方人	126.98	0.62	1.32 ± 1.51

第 11 表 頭長耳頭高指数, 頭型分数表

頭型	低頭型	中頭型	高頭型
頭長耳頭高指数	~57.9	58.0~62.9	63.0~
巨摩地方人	0.71%	12.31%	86.98%
大和人	0.49	2.21	97.30
越中 人	3.79	32.40	64.81
飛弾 人	2.37	16.06	81.57
信州上伊那人	—	8.00	92.00
信州信田 人	—	9.50	90.50
三宅島 人	2.40	17.60	80.00

八丈島 人	1.54	7.95	90.51
出雲 人	0.87	11.80	87.33
信州安曇地方人	1.32	14.18	84.50

巨摩地方人は殆んど大部分が高頭型に属するが, 低頭型も非常に僅かに存在する。全体の分布として出雲人, 信州安曇地方人, 八丈島人に近いが, 大和人, 信州上伊那人, 信州飯田人に比すれば高頭型の割合が小さくなつて居る。

型差によつてこの頭長耳頭高指数を他地方と比較すると第 12 表の通りに成る。

第 12 表 頭長耳頭高指数に於ける巨摩地方人と他地方人との型差

各地人	M_2	巨摩地方人 69.11 ± 0.31	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	64.18	4.93	22.62 ± 2.03
越中 人	64.29	4.82	22.75 ± 1.93
加賀平地人	67.02	2.09	10.13 ± 1.57
加賀山地人	66.56	2.55	12.03 ± 1.71
能登南部人	65.44	3.67	19.96 ± 1.73
奥能登人	64.64	4.47	22.66 ± 1.71
大和人	71.06	1.95	7.42 ± 1.29
出雲 人	69.20	0.09	0.39 ± 1.42
白川 人	62.75	6.36	27.09 ± 2.25
飛弾 人	66.76	2.35	10.10 ± 1.47
東海 人	68.67	0.44	1.74 ± 1.46
土佐 人	67.12	1.99	8.09 ± 1.54
日向 人	67.78	1.33	6.25 ± 1.54
三宅島 人	66.89	2.22	9.03 ± 2.15
八丈島 人	68.76	0.35	1.44 ± 1.59
壱岐 人	67.69	1.42	6.48 ± 2.72
対馬 人	66.49	2.62	10.48 ± 2.28
南朝鮮 人	69.86	0.75	3.32 ± 1.48
信州飯田 人	69.53	0.42	1.82 ± 1.87
信州上伊那人	68.09	1.02	4.76 ± 1.54
北部信州 人	66.30	2.81	11.99 ± 1.52
信州安曇地方人	68.06	1.05	3.68 ± 1.46

これによると巨摩地方人は出雲人, 八丈島人, 東海人, 信州飯田人等と近く, 反対に北海道アイヌ人, 越中人, 奥能登人, 白川人等とは遠縁にあたる。

5. 頭幅耳頭高指数

これは耳頭高の頭最大幅に対する%である。巨摩地方では 83.43 である。

Martin, Saller 氏の頭幅耳頭高指数による頭型分類を示すと第 13 表の様になる。全体の分布としては

出雲人、八丈島人、信州上伊那人に比較的近い分布である。

巨摩地方人は約 85% が Metrio 又は Akro Keph に含まれ、此の表に示された他地方に比較して Tapeinokephal の占める割合が少ない。

第 13 表 頭幅耳頭高指数頭型分類表

頭 型	Tapeino Keph	Metrio Keph	Akro Keph
頭幅耳頭高指数	~78.9	79.0~84.9	85.0~
巨摩地方人	14.63%	49.01%	36.36%
大和 人	13.74	40.47	45.79
越中 人	23.34	47.48	30.16
飛 弾 人	24.91	42.22	32.88
信州上伊那人	18.00	53.00	29.00
信州飯田人	23.00	44.00	33.00
三宅島 人	30.40	39.20	30.40
八丈島 人	24.10	42.82	33.08
出 雲 人	17.29	44.71	38.00
信州安曇地方人	27.60	37.43	34.97

他地方との比較を型差によって求めると第 14 表のやうになる。出雲人、土佐人、八丈島人、南朝鮮人、信州飯田人には極めて近縁関係にあり、奥能登人、白川人とは遠縁関係にある。

第 14 表 頭幅耳頭高に於ける巨摩地方人と他地方人との型差

各 地 人	M_2	巨摩地方人 83.43 ± 0.37	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m (T.D)$
北海道アイヌ人	83.93	0.50	1.81 ± 2.02
越 中 人	82.44	0.99	3.72 ± 1.91
加賀平地人	84.48	1.05	4.27 ± 1.89
加賀山地人	82.56	0.87	3.38 ± 1.71
能登南部人	82.46	0.97	4.13 ± 1.63
奥 能 登 人	80.04	3.39	15.92 ± 1.63
大 和 人	85.05	1.62	5.32 ± 1.32
出 雲 人	83.55	0.12	0.43 ± 1.43
白 川 人	78.27	5.16	18.52 ± 2.26
飛 弾 人	82.56	0.87	3.07 ± 2.23
東 海 人	85.23	1.80	5.79 ± 1.45
土 佐 人	83.76	0.33	1.09 ± 1.54
日 向 人	84.67	1.24	4.67 ± 1.48
三 宅 島 人	82.00	1.43	4.87 ± 2.14
八 丈 島 人	82.98	0.45	1.56 ± 1.60
壱 岐 人	84.54	1.11	4.31 ± 2.73
対 馬 人	81.42	2.01	6.79 ± 2.29

南 朝 鮮 人	83.34	0.09	0.32 ± 1.47
信 州 飯 田 人	83.01	0.42	1.51 ± 1.85
信 州 上 伊 那 人	82.62	0.81	3.08 ± 1.69
北 部 信 州 人	80.72	2.71	9.70 ± 1.52
信 州 安 曇 人	82.49	0.94	2.98 ± 1.47

顔面に関する研究成績

顔面に関する研究は、軀幹、四肢及び頭部に於ける諸計測並びに指数と共に人種比較上極めて重要な指標をなしている。此の顔型を示す、計測値、指数値を一括すると第 15 表の様に成る。

第 15 表 顔面の計測値及び指数値

形 質		巨摩地方人
n		253
顔 骨 弓 幅 (mm)	$M \pm m$	139.95 ± 0.30
	$\sigma \pm m \sigma$	4.90 ± 0.21
	$V \pm mv$	3.50 ± 0.15
頭幅顔骨弓幅指数	$M \pm m$	94.90 ± 0.19
	$\sigma \pm m \sigma$	3.09 ± 0.13
	$V \pm mv$	3.25 ± 0.14
顔骨弓幅前頭幅 指	$M \pm m$	74.77 ± 0.20
	$\sigma \pm m \sigma$	3.27 ± 0.14
	$V \pm mv$	4.37 ± 0.19
下 顎 角 幅 (mm)	$M \pm m$	107.19 ± 0.33
	$\sigma \pm m \sigma$	5.39 ± 0.23
	$V \pm mv$	5.02 ± 0.22
顔骨弓幅下顎角幅 指	$M \pm m$	76.81 ± 0.21
	$\sigma \pm m \sigma$	3.48 ± 0.15
	$V \pm mv$	4.53 ± 0.20
形 態 顔 面 高 (mm)	$M \pm m$	121.39 ± 0.37
	$\sigma \pm m \sigma$	6.04 ± 0.26
	$V \pm mv$	4.97 ± 0.22
形 態 顔 面 指 数	$M \pm m$	86.93 ± 0.29
	$\sigma \pm m \sigma$	4.62 ± 0.20
	$V \pm mv$	5.31 ± 0.23

1. 顔骨弓幅

顔骨弓幅は最小前頭幅、下顎角幅と共に顔面の横径を示す三重要計測値として、Kretschmer, Sigaud, Kruse 氏の体型分類に附随しての顔面分類に重要な役割を示しており、しばしば用いられる測定値である。これについて計測値とそれに伴う比率を求め、それらについて考慮するならば一層の価値を有する

ものとなる。更に顴骨弓幅は環境及び外的因子の影響を受けること僅少であり、遺伝的關係を高度に示すものとされている。変異係数も比較的小さい（巨摩地方では 3.50）ことはこの値の安定性を示す。

巨摩地方の測定成績は 139.95 mm であつた。

2. 頭幅顴骨弓幅指数

本指数は顴骨弓幅の頭最大長に対する比であり、顔型を示す重要な指数の一つである。

巨摩地方に於いてはこの指数は 94.90 であつた。

3. 下顎角幅

下顎角幅は顔面下部の横径を示し、顴骨弓幅と共に顔型分類上重要視されている。Sigaud 氏の体型分類では消化器型及び脳型を、この下顎角幅の大小によりピラミッド型及び逆ピラミッド型として判定に利用している。本調査では 107.19 mm であつた。

4. 顴骨弓幅下顎角幅指数

本指数はもつともしばしば顔型分類に使用される。顔中央部以下の顔型の広、狭が示されるので顔型研究上欠くべからざるものとされている。巨摩地方の成績は、76.81 であつて中等型に属している。

Landburg-Linders 及び Saller 氏の顔型分類法を用いて観察すると第 16 表のようになる。

第 16 表 顴骨弓幅下顎角幅指数顔型分類表

顔 型	過狹型	狭 型	中等型	広 型	過広型
顴骨弓幅下顎角幅指数	~69.9	70.0 ~74.9	75.0 ~79.9	80.0 ~84.9	85.0~
巨摩地方人	2.37	23.32	54.54	17.00	2.77
大和人	0.40	7.67	52.21	36.12	3.87
飛弾人	1.49	26.03	51.18	20.42	0.87
信州上伊那人	1.00	20.00	52.00	26.00	1.00
信州飯田人	0.50	15.00	57.50	25.00	2.00
三宅島人	1.60	20.00	52.80	24.80	0.80
八丈島人	2.57	27.18	51.02	18.46	0.77
出雲人	0.60	22.72	60.72	15.01	0.94
越中人	1.07	18.27	56.45	23.65	0.53
信州安曇地方人	0.38	5.48	58.60	34.41	1.13

即ち、巨摩地方人に於いて中間値である中等型が全体の五割を越え、又狹型は広型よりも僅かながら多い。全体として中等型の傾向が認められる。他地方の中では八丈島人、出雲人に比較的近いといえよう。

5. 形態顔面高

形態顔面高は顔面従径を示す計測値であり、測定法に二法ある。本調査に於いては Martin 氏法により

Nasion と Gnathion との投射高を測定した。（他法は Nasion かわりに鼻根最凹部を用いるものである）その成績は 121.39 mm であつた。

6. 形態顔面指数

本指数は形態顔面高と顴骨弓幅との比である。顔面横径と縦径との関係を示し、顔型分類上重要である。本地方に於いての成績は 86.93 である。

形態顔面指数により顔型の分類をすると第 17 表のようになる。これによつて見ると巨摩地方は他地方に較べて中等型の割合が多く、広型及び過広型の割合は少く、八丈島人、出雲人の分類に相似して居る。

第 17 表 形態顔面指数顔型分類表

顔 型	過広型	広 型	中等型	狭 型	過狹型
形態顔面指数	~78.9	79.0 ~83.9	84.0 ~87.9	88.0 ~92.9	93.0~
巨摩地方人	3.56	23.72	35.57	28.46	8.69
大和人	9.60	32.73	29.21	21.96	6.49
越中人	8.06	29.03	31.72	24.19	6.98
飛弾人	17.81	35.24	29.64	14.82	2.49
信州上伊那人	8.10	33.80	29.60	24.00	4.50
信州飯田人	10.00	29.00	33.50	22.00	5.50
三宅島人	6.40	26.40	30.40	30.40	6.40
八丈島人	1.28	22.56	36.67	29.23	10.26
出雲人	4.36	26.01	33.58	28.21	7.84
信州安曇地方人	12.85	40.08	28.17	15.31	3.59

型差によりこの指数に基づく他地方との比較を示すと第 18 表の様に成る。八丈島人と最も近親度が高く、出雲人、北部信州人、土佐人等が此に次いで居る。遠縁に当る地方として能登南部人、奥能登人、白川人、飛弾人、信州安曇人があげられる。

第 18 表 形態顔面指数における巨摩地方人と他地方人との型差

各 地 人	M_2	巨摩地方人 86.93±0.29	
		$M_1 \sim M_2$	$T.D \pm m(T.D)$
北海道アイヌ人	85.32	1.61	6.87±2.03
越中人	85.55	1.38	5.90±1.90
加賀平地人	87.70	0.77	3.35±1.33
加賀山地人	87.44	0.51	2.34±1.66
能登南部人	83.62	3.31	14.99±1.40
奥能登人	84.30	2.63	11.49±1.51
大和人	85.26	1.67	6.86±1.32
出雲人	86.42	0.51	2.22±1.35
白川人	84.03	2.90	12.70±2.30

飛 弾 人	83.51	3.42	14.67±1.44
東 海 人	87.79	0.86	3.25±1.44
土 佐 人	86.43	0.50	2.23±1.65
日 向 人	84.95	1.98	9.06±1.43
三 宅 島 人	86.28	0.65	2.95±2.16
八 丈 島 人	87.13	0.20	0.89±1.61
壺 岐 人	比較資料なし		
対 馬 人			
南 朝 鮮 人	比較資料なし		
信 州 飯 田 人	85.24	1.69	7.11±1.87
信 州 上 伊 那 人	85.22	1.71	7.52±1.68
北 部 信 州 人	87.44	0.51	2.17±1.47
信 州 安 曇 地 方 人	84.07	2.86	12.64±1.52

平均型差による総合比較法

本調査に於いては各人種間の近縁関係の度合を示すのに型差及び平均型差の方法を使用した。従来人種の識別には差の有意性 $\left(\frac{M_1 - M_2}{\sqrt{m_1^2 + m_2^2}} \right)$ を多数の計測項目、指数項目について計算し、これを平均してその近親度を判定しようとした。Pearson 氏の種族類似係数及びドイツ人類学派の愛好している Mollison, Poniatowsky 氏の型差の方法等が用いられたが、現在最も使用されている方法は種族型差である。型差は当初係数 50 として Mollison 氏により考案されたが、後 Poniatowsky 氏は便宜上係数を 100 に修正した。

古屋博士は更に係数を 10 とされ II の計測法の項で示した Typendifferenz (T.D) の方法に修正された。平均型差も同様に古屋博士は、すべての項目の型差を同価値に取扱い単純に平均して平均型差を出すのもよいが、相等不合理を生ずるためにこれを平等に扱わず、それぞれの変異係数 V の逆数 $1/V$ により重みづけをされた。換言すれば、軟部測定時の計測値と骨部測定時の計測値との信頼度、即ち変異係数の逆数を荷重することによりそれぞれの型差を補正し、その平均値を求める方がより確実であると提唱され、II の測定方法の項で示した。M.T.D の式に修正された。この修正された型差及び平均型差の算出方法により第 19 表の如き成績を得た。これを図示すると第 3 図の如くなる。この場合平均型差は身長、頭最大長、頭最大幅、頭長幅指数、耳頭高、頭長耳頭高指数、頭幅耳頭高指数、形態顔面指数の代表的 8 項目について算出した。

各地方人との平均型差 7.0 以下のものは近親度が高く、12.0 以上のものは種族差異が認められるものとして検討すると、巨摩地方人は、出雲人、八丈島人、

第 19 表 平均型差の巨摩地方人と他地方人の比較

各 地 人	巨摩地方人
	M.T.D±m (M.T.D)
出 雲 人	2.97±1.34
八 丈 島 人	3.14±1.72
信 州 上 伊 那 人	3.81±1.99
大 和 人	4.36±1.23
信 州 飯 田 人	5.13±1.95
三 宅 島 人	5.77±2.13
東 海 人	6.13±1.47
南 朝 鮮 人	6.42±1.39
信 州 安 曇 地 方 人	6.52±1.53
土 佐 人	6.61±1.53
北 部 信 州 人	7.36±1.48
加 賀 山 地 人	7.83±1.68
対 馬 人	7.87±2.34
飛 弾 人	8.18±1.44
日 向 人	8.46±1.40
加 賀 平 地 人	10.07±1.35
奥 能 登 人	10.71±1.51
壺 岐 人	11.06±3.01
白 川 人	12.61±2.27
能 登 南 部 人	13.08±1.43
越 中 人	15.54±1.93
北海道アイヌ人	19.21±2.03

と近親度が極めて高く、以下、信州上伊那人、大和人、信州飯田人、三宅島人、東海人、南朝鮮人、信州安曇人、土佐人がこれに次いで近く、白川人、能登南部人、越中人、北海道アイヌ人とは種族差のあることが認められる。

偏差折線による比較

平均型差による比較法は多数の種族との近親度を一数值で一目瞭然に比較観察しうる特徴を有するが、個々の型差の正負の

方向が無視されている。故にこの欠点を補うために Mollison 氏の偏差折線図示法により検討した。これ

には、偏差曲線法 $\frac{M_1 - M_2}{\sigma_1}$ 、偏差比曲線法 $\frac{M_1 - M_2}{m_1}$ 、

第 3 図 巨摩地方人各地方人平均型差

型差曲線法 $10(M_1 - M_2) \left(\frac{1}{\sigma_1} - \frac{1}{\sigma_2} \right)$ の3種の方法があるが、うち型差曲線法は基礎種族と被比較種族とが互に変更しても正負の方向が逆となるだけで絶対値は変わらず、基線に対して対称的な曲線を描くため応用も広いのでこれを用い、巨摩地方人と各地方人との比較を試みた。

比較の対象としては出雲人、八丈島人、信州上伊那人、越中人、北海道アイヌ人の五つをとつた。これを第4図によつて見れば明らかな如く、北海道アイヌ人、越中人の遠縁にあること、出雲人、八丈島人、信州上伊那人の近縁にあることが各項目毎の差の正負の方向と共に明瞭に図示されている。

第4図 対巨摩地方人型差曲線

指数関係図示法による比較

人種近親度を比較する場合各計測値も重要であるが、これらより算出される指数値はより重要である。しかし指数値のみではその構成分子がはつきりせず、指数値の差が如何にして生じたかも判明しない。この弊害を除くために指数値とその構成分子との相互関係を図示することにより比較検討する方法が用いられている。

これは今村、熊沢両氏により朝鮮、満蒙、日本内地人について比較検討されている。

頭長幅指数とその構成分子である頭最大長、頭最大幅の相互関係を図示したものが前掲の第2図である。巨摩地方人は短頭型であることを示し、出雲人、大和人、信州上伊那人、八丈島人、南朝鮮人、信州飯田人等と比較的近く、北海道アイヌ人、越中人、壱岐人、能登南部人等と相当離れていることを示している。又巨摩地方人は今村氏の分布図により示されるごとく、朝鮮、満洲人との類似を図示しており、他地方より最も朝鮮人に類似して居る。頭長耳頭高指数図、頭幅耳頭高指数図、形態顔面指数図等も大体において頭長幅指数図と同様の傾向を示している。

三角形図示による比較

平均型差、偏差曲線、指数関係図により他地方人との比較を試みたが、相互間の関係をより一層明瞭にするため三角形図示による平均型差の比較を第5図に示した。但し、ここでは出雲人、八丈島人、信州上伊那人、大和人、信州飯田人のみを対照とした。

第5図

本図に示される様に巨摩地方は出雲、八丈島に近く、次いで信州上伊那、大和、信州飯田の順に成るが、これにより同時に又、八丈島、信州上伊那、大和、信州飯田相互間の遠近も図示されている。例えば上伊那地方は八丈島より巨摩地方に近く、飯田は巨摩より八丈島に近い。

むすび

余は昭和26年より28年迄の三年間、体質人類学的見地から山梨県で比較的交通の隔絶している地方として、中巨摩郡の二町三村を取り、その住民253名について軀幹、四肢、頭部及び顔面について生体測定を行い、25項目の計測値及び指数値に基づいて精細なる研究を行つた。これを現在までに詳細検討されている他地方人と比較観察し、種族関係上以下の如き結論をえた。

1. 巨摩地方人は各地人に比して身長において、中等の部に属し、その平均値 159.50 cm は Martin 氏の身長分類による「小」に属する。

2. 上肢長は比上肢長による分類中「中腕」に属するものが 59% を占め過半数中腕であるが、全体の傾向として信州上伊那人、八丈島人、出雲人等に近い値である。

3. 頭最大長は平均 184.68 mm で各地人に比し短い部に属し、大和人、信州飯田人、南朝鮮人、信州上伊那人、出雲人、東海人等に近い値である。

頭最大幅は平均 153.20 mm で各地人に比し広幅の地位を占め、特に大和人、信州上伊那人、信州安曇人等に近い。

4. 頭長幅指数は 82.71 で出雲人に最も近く、大和人、信州上伊那人がこれに次いでいる。この指数は各地方住民に比し、広い部に属している。頭型分類によれば短頭型に属するものが約半数で最も多く、中等型に属するものが約 3 割、過短頭型約 2 割で此に次いで居り、その分布は出雲人、八丈島人、信州上伊那人に相似している。

5. 耳頭高は各地人に比し高い部に属し、東海人、信州飯田人等が最も近く、出雲人、土佐人、日向人、八丈島人等が此に次いで居る。

6. 顎骨弓幅下顎角幅指数は 76.81 で顔型分類によると、日本人としてもつとも多い中等型に属し、その分類分布は出雲人、八丈島人に相似している。

7. 形態顔面指数は 86.93 で他地方に比べて大の部に属する。この指数による顔型の分類ではその分布は八丈島人、出雲人に近い。

8. 平均型差による他地方との比較をしてみると、巨摩地方人は出雲人、八丈島人、信州上伊那人、大和人と濃厚の種族的近親度を示している（平均型差 5.0 未満）。

9. 平均型差 12.0 以上で種族的近親度において、大いなる懸隔を示すものとして、北海道アイヌ人、越中人、能登南部人、白川人があげられる。

総括

巨摩地方住民は、体質人類学的に最も価値の高い諸形質の測定の結果から判断すると、先史時代以来わが国最高の文化をもたらしたと思はれている、出雲人、

八丈島人、信州上伊那人、大和人等の大陸系移住民族に近親度の高いことが認められた。特に頭長幅指数に関する限り、出雲人のそれと全く近似した短頭型である。此の意味で同地で行はれている伝説や口碑も或る程度の信頼性があるかも知れない。

以上の点については従来明かにされなかつた知見であり将来明かにされるであらう日本民族の混成史に重要な寄与を致すものであらう。

擧筆するに当り、本研究について終始御指導、御校閲を賜つた恩師日本医大古屋芳雄教授に深甚なる謝意を表する。

なお測定時特に御援助を頂いた小尾小笠原保健所長に対して感謝を捧げる。

参考文献

- 1) Martin: Lehrbuch der Anthropologie, Aufl. 2 (1928)
- 2) 古屋芳雄: 医学統計法の理論と実際 (1935)
- 3) 川上理一: 衛生統計学 (1951)
- 4) 中巨摩郡連合教育会: 中巨摩郡誌 (1928)
- 5) 名執忠則: 中巨摩郡下における先住民族の遺跡及び遺物について (1940)
- 6) 甘利龜雄: 楢形山とその附近 (1954)
- 7) 白柳秀湖: 日本民族研究
- 8) 八木高次: 生体測定 (横手社会 衛生叢書第 12 冊) (1936)
- 9) 三宅宗悦: 人類学先史学講座, 第 19 卷, 1
- 10) 村田四郎: 民族生物学研究 (第 2 輯) (1937)
- 11) 村田四郎: 同上 (第 3 輯) (1937)
- 12) 古屋芳雄外: 同上 (第 4 輯) (1937)
- 13) 加藤義治郎: 同上 (第 5 輯) (1938)
- 14) 加藤義治郎: 同上 (第 7 輯) (1939)
- 15) 能沢清志: 大和人、出雲人の体質人類学的研究 (厚生科学研究) (1944)
- 16) 上田栄吉: 土佐人の体質人類学的研究 (未発表)
- 17) 古屋芳雄: 日向人の体質人類学的研究 (未発表)
- 18) 大森暢久: 日医大誌, 17, 6 号 (1950)
- 19) 矢ヶ崎徳蔵: 民族生物学研究 (第 2 輯) (1936)
- 20) 古屋芳雄: Rassenkunde der Aino (1937)
- 21) 高野武悦: 伊那住民の体質人類学的研究 (長野県衛生部研究資料第 5 号) (1952)
- 22) 小浜・伊藤: 大邱医学専門学校雑誌, 2, 2 号 (1940)
- 23) 小浜・伊藤: 人類先史学講座, 第 19 卷 (1940)
- 24) 湯浅秀: 北部信州人の体質人類学的研究